

形式代名詞 it

英語では天候を表す場合に *It rains. It snows.* など主語に *it* を使います。日時や距離の場合も同じですね。この *dammy it* を必要とするのは英語だけでなく、他のゲルマン語やフランス語も同様です。ただし、古英語では要らなかったそうです。フランス語 *Il pleut. Il neige.* ドイツ語 *Es regnet. Es schneit.* スウェーデン語 *Det regnar. Det snöar.*

ケルト諸語系には *it* に相当する中性の代名詞がなく、アイルランド語では天候の主語として *sé (he)* を、ウェールズ語では、*hi (she)* を立てるそうです。Tá sé ag cur báistí Tá sé ag cur sneachta Mae hi'n bwrw glaw Mae hi'n bwrw eira Mae hi'n braf (It is fine) Mae hi'n oer (It is cold) curは置く eiraは投げる

では、他の言語ではどういのでしょうか。フランス語以外のロマンス語では、代名詞なしで動詞一語で済みます。イタリア語 *Piove. Nevica.* スペイン語 *Llueve. Nueva.* ルーマニア語 *Plouă. Ninge.* ギリシア語 *Βρέχει. Χιονίζει.* チェコ語 *Prší. Sněží.* スロベニア語 *Dežuje. Sneži.* リトアニア語 *Lyja. Sninga.* アラビア語 *tamtir. tathliju.*

日本語のように“雨”を主語にして“降る、落ちる”などの動詞で受ける言葉も沢山あります。

ポーランド語 *Pada deszcz. Pada śnieg.* クロアチア語 *Pada kiša. Pada snijeg.*

ロシア語 *Идет дождь. Идет снег.* ヘブライ語 *Yered geshem. Yered sheleg.*

スワヒリ語 *Mvua inanyesha. Theluji inanyesha.* ヒンディー語 *Bārish hotī hae. Barf partī hae.*

中国語 下雨. 下雪. 韓国語 *Piga naelida. Nuni naelida.*

そのうちで“雨降る”のような雨専用の動詞を持つ言葉があり、それが雪にも使われるものもあります。ペルシア語では主語と動詞の両方に雨を使った、*Bārān mībārad.* (雨が雨降る) *Barf mībārad.* (雪が雨降る) という言い方があり、トルコ語の *Yağmur yağıyor. Kar yağıyor.* もまったく同じで、フィン語 *Sataa vettä. Sataa lunta.* ブルガリア語 *Вали. Вали сняг.* も似た言い方です。

一方、インドネシア語では *Hujan turun.* (雨が降る) の方が派生動詞 *berhujan* (雨降る) よりずっと多く使われますが、雪 *salju* の方は *bersalju* (雪降る) が使われます。ラトビア語 *Līst lietus. Snieg.* ハンガリー語 *Esik az eső. Havazik.* も同様のようです。雨を名詞として使う表現と動詞として使う表現のどちらも可能な言語もありますが、その場合もどちらか一方を使うのが普通だといえます。同族語、たとえばスラブ諸語でいろんな言い方をしているのが面白いですね。

述語として形容詞を用いる場合も同様です。

It is cold. Es is kalt. Det är kallt.

ただし、ルーマニア語以外のロマンス語では *be* 動詞ではなく、*do* に相当する言葉を使います。

Fr. *Il fait froid.* It. *Fa freddo.* Sp. *Hace frío.* Por. *Faz frio.* Rom. *E rece.*

天候表現など以外でも形式代名詞は使用されます。

フランス語 *Il y a toujours une chanson.* (There is always a song) やドイツ語 *Es gibt kein Bier im Himmel.* (There is no beer in the heaven)、*Es waren zwei Königskinder.* (There were a prince and a princess) では存在文に形式代名詞を使い、スウェーデン語でも同様です。

Sv: *Det var en gång – rymden.* (Once upon a time there was – the space)

Det finns bara krig. (There is always war)

他にも次のような使い方が見られます。

Es tut mir Leid. (I am sorry) *Ich habe es eilig.* (I am hasty) *Dan: Er du japaner? - Ja, det er jeg.*

形式代名詞が関わってくるもう一つの構文は、仮主語の *it* です。ここでも先ほどの場合と全く同じ事情で、ゲルマン語およびフランス語が英語と同じく形式主語を取ります。

Il est difficile de parler japonais. (It is difficult to speak Japanese.)

Il faut aller à l'école. (It is required to go to school)

Es ist schwierig, Japanisch zu sprechen. Sve: *Det är svårt att prata japanska.*

Il est bien connu qu'elle chante bien. (It is well known that she sings well.)

Il faut que tu ailles à l'école. (It is required that ...)

Es ist allgemein bekannt, dass sie singt gut. *Det är allmänt känt att hon sjunger bra.*

仮目的語についても同様ですが、英語でも *I think it easy to/that ...* よりも *I think that it is easy to/that ...* のような構文の方が好まれることが多いようです。フランス語では仮目的語なしで済ませるようです。

Je trouve naturel que j'aime les femmes et non les hommes. (I find it natural that I like women and not men.)

ヒンディー語では、*it ... that* 構文のみ仮主語 *yeh* を使うそうです。

Hin: *Yeh sarvavidit hai ki voh acchā gātī hai.* (It is well known that she sings well.)

ハンガリー語では、*hogy (that)* を受ける代名詞 *az (that)* の格変化形を前の主文に置くことができます。

Azt hiszem hogy megfázdam (I think it that I have a cold)

フィン語では、*että (that)* 節および疑問節を補助代名詞 *se (it)* で受けます。補助代名詞は、動詞が要求する格語尾を提供する役割も持っています。*että* 節が他動詞の主語である場合および *että* 節を文頭に置く場合は *se* を使うのが普通で、*että* 節が目的語である場合などでも使うことがあります。

Fin: *Tuntuu siltä, että alkaa sota.* (It is felt that a war will begin) *siltä* は *se* の奪格

フランス語以外のロマンス語は、やはり形式代名詞を使いません。スラブ諸語も *be* 動詞の省略の有無はありますが、ほぼ同じ文型です。ペルシア語、アラビア語も同様です。

It: *È difficile parlare giapponese.* Sp: *Es difícil hablar japonés.* Por: *É difícil falar japonês.*

È risaputo che canta bene. *Es bien sabido que ella canta bien.* *Sabe-se que ela canta bem.*

Трудно говорить по-японски. Cze: *Je těžké mluvit japonsky.* Pol: *Trudno mówić po japońsku.*

Известно, что она хорошо поет. Je známo, že dobře zpívá. Poznato je da ona dobro pjeva.

Per: *Fārsī sohbat kardan jāleb ast.* *Ma'lūm ast ke khūb āvāz mīkhānad.*

注目されるのは、疑問文の場合と同じくこの場合もフランス語がゲルマン諸語と同じグループになっていることです。フランスは紀元前1世紀にカエサル の 征服によってガリア語からラテン語に徐々に置き換わってゆき、5世紀後半からゲルマン系のフランク族の支配下に入ったので、ゲルマン語の影響を深く受けていてもおかしくはありませんが、スペイン語もずっと西ゴート人の支配下にあった点では同じであり、何がフランス語の“ゲルマン語化”の要因になったのかは興味の尽きないところです。

形式代名詞を用いるかどうかは、言い換えれば主語が必須かどうかということです。この点で世界の言語は三つに区分されます。これからも分かるように、必ず主語を必要とする言葉は極めて少数派です。

第一に、主語が必須のもの：ゲルマン諸語とフランス語。

第二に、人称変化で暗示されるので主語がなくてもよい空主語 (null-subject, no-drop) 言語：これはさらに二分されており、

第1は完全型；フランス語以外のロマンス語、ギリシア語、ヒンディー語。

第2は部分型；スラブ諸語、フィン語などウラル諸語、アルバニア語、バスク語、アラビア語などアジア・アフリカ(セム・ハム)諸語、ペルシア語、トルコ語、ベンガル語、パンジャブ語、グジャラート語、シンド語、タミル語。

第三に、無主語が許容される主語省略型（主題優勢 **topic-prominent**）言語：モンゴル語、朝鮮語、日本語、中国語、ベトナム語、ビルマ語、マレー語、タミル語、マラヤラム語。